

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 6 月 17 日現在

機関番号：17501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K01931

研究課題名(和文) 児童福祉施設へのアウトリーチ型権利擁護システムの開発

研究課題名(英文) development of visiting advocacy for children's homes

## 研究代表者

栄留 里美 (Eidome, Satomi)

大分大学・福祉健康科学部・講師

研究者番号：60708949

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：英国をモデルとして児童養護施設を定期訪問する「訪問アドボカシー」を2年間試行的に行った。アドボカイトを利用した子ども19名、職員7名にインタビュー調査を行い、事前ニーズ調査との比較から実践を踏まえた意義・課題を明示した。

職員の多忙さを背景に、子ども・職員双方が個別面談を高く評価した。面談で子どもが不満を話すことで落ち着き、自分から話すようになったといった【子どもに肯定的変化があった】。職員は「後回し」になっていた子どもの思いを聴こうと【職員の権利意識が向上した】。一方、子どもは訪問の【時間不足】を、職員は秘密保持等の【アドボカイトの原則への不満】【役割の分かりにくさ】が今後の課題とした。

## 研究成果の学術的意義や社会的意義

施設訪問アドボカシー実践をアクションリサーチにより、約2年間NPOと共同で実施することができた。実践における影響を調べるため、子どもや職員の個別インタビュー、グループインタビューを実施。これらの成果を査読論文及び3冊の本にまとめることができた。また本アクションリサーチがNHKなどテレビや新聞などで取り上げられ、一般の方にも情報を発信できたと考え。また厚生労働省の子ども権利擁護ワーキングで発表等、複数の発表の機会を得たことで、アドボカイト制度(児童福祉法改正等)の実現化に寄与できたのではないかと考える。

研究成果の概要(英文)：We are conducting action research of advocates visiting a Japanese children's home based on practices from the UK. This paper is the result of personal interviews with 19 children and seven staff members of the home who communicated with us regarding advocacy trial practices.

The children and staff mentioned that the individual interviews were positive. As the children were able to discuss their dissatisfaction with the home and schools, they could calm down and express their own dissatisfaction, staff could listen to children more than they previously could, and they have obtained 【an awareness of rights】. Children mentioned the 【shortage of the individual interviews】 as a barrier. Staff mentioned 【doubt regarding the advocates' roles】 【hard to understand roles】 because advocates have principles(ex: confidentiality).

研究分野：子どもアドボカシー

キーワード：アドボカイト 訪問アドボカシー 児童養護施設 権利擁護 意見表明権 子ども アドボカシー アウトリーチ

### 1. 研究開始当初の背景

平成 12 年の社会福祉基礎構造改革によって、成人の施設と同様に児童福祉施設にも苦情解決受付担当・責任者・第三者委員を任命することとなった。さらに、児童養護施設など社会的養護の施設は被措置児童等虐待ガイドラインの策定など、権利擁護への対応が求められている。しかし、これらは施設内の内部アドボカシーのシステムであるため、独立性が十分でないことや子どもからアクセスしにくいという限界がある。そのため施設でのケアに関する懸念や苦情を入所児童が相談するのは困難であると言われている。まず、「子ども」であるため言語的・手段的に伝達困難ということと共に、保護者ではない職員に「世話になっているという意識」がある(山田 2005)。平成 25 年度の児童福祉施設内虐待の通告受理件数は 288 件で過去最多(厚生労働省 2014)となったが、子ども自身からの通告は 3 割と少ないのが現状である(厚生労働省 2014)。加えて、施設入所理由の大半が保護者による虐待や育児困難であることから、保護者に代弁者の役割を期待しにくいという特徴もある(伊藤 2010)。普段は職員に要望を伝えられる子どもであっても、施設内虐待を通告する場合には、職員とは別の、子ども側に立つ代弁機関が必要となる。許斐(1991)は日本に子ども側に立つ外部の代弁機能の不在を当時から指摘していた。また、近年児童養護施設の小規模化が推進されているが、小規模化は「閉鎖的あるいは独善的なかかわりになる危険性」(厚生労働省:2012)があり、外部からの介入が一層求められている。

国連児童の権利条約で定められた意見表明権の保障、ならびに平成 29 年 4 月施行の改正児童福祉法に新たに規定される「児童の意見尊重」という観点からも、今こそ子どもたちが意見を伝え、相談しやすい新たな権利擁護のシステムが求められている。

これまでの研究成果を踏まえ着想に至った経緯

私たちはイギリスの施設訪問アドボカシーをモデルにして、日本におけるアウトリーチ型権利擁護の導入・制度化が児童養護施設入所児童の権利擁護として有効であることを検証する研究を展開させてきた。イギリスの子どもアドボカシーサービス(Children's Advocacy Service 以下 CAS)は、施設内虐待について沈黙を強いられた入所児童の調査報告(Waterhouse 2000)の反省から 2002 年に法制化した制度である。CAS は、子どもにより身近になるよう定期訪問(週 1 回)を行う施設訪問アドボカシーを実施している。私たちは CAS の研究のため、平成 21 年 9 月~22 年 8 月及び平成 23 年 2 月にイギリスの子どもアドボカシーの団体 27 カ所にインタビューを実施し、その実践方法・契約などの基盤整備について明らかにしてきた(栄留:2015)(堀・栄留ら:2009・2011)。平成 23 年に CAS 研究者及び実践者の招聘を契機に、日本の研究者らと共同研究し、日本での CAS の可能性を検討してきた(栄留ら:2013)。平成 25 年以降、日本で施設訪問アドボカシーを導入する上でどのようなニーズ・懸念があるのか明らかにするために、児童養護施設 19 カ所の職員 23 名及び施設 3 カ所に入所中の児童 25 名を対象に質的調査(挑戦的萌芽研究)を実施した(栄留ら:2016)。その結果、ニーズとして子どもの意見表明権が子どもや施設職員に浸透し、支援の質の変容の契機となると同時に、子どもへの不適切な関わりを予防できることが期待されていた。懸念として、アドボケイトのスーパービジョン体制確立の必要性、アドボケイトの守秘や子ども中心の活動に対する疑問が出された。これらの調査結果をふまえて、アウトリーチ型権利擁護のモデル案を作成した。

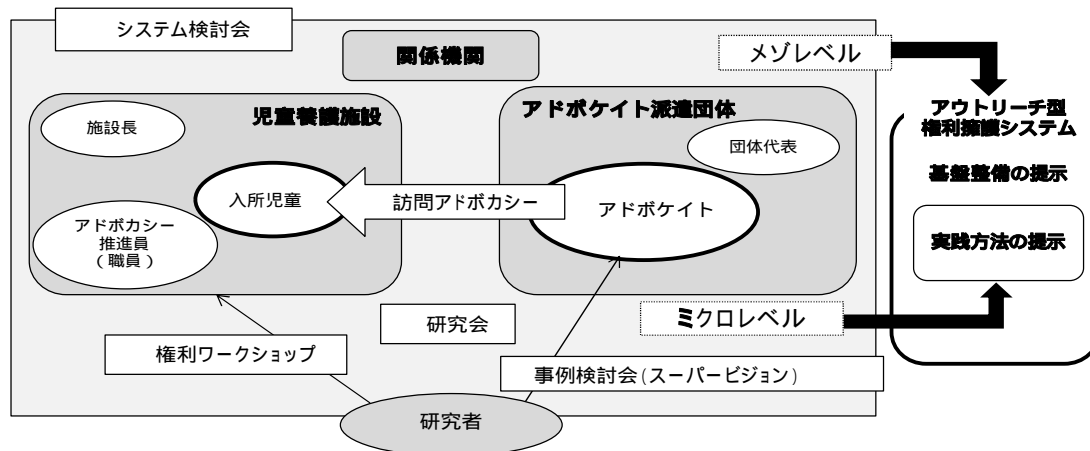
本研究は、このモデル案を試行的に実践し、アクションリサーチによって、具体的な実践方法及び基盤整備を明らかにするものである。そして、これらの結果をマニュアル化し、その普及に向けた体制整備へと発展させるものとして、本研究課題は位置づけられる。

### 2. 研究の目的

本研究は児童養護施設、アドボケイト派遣機関、研究者との協働により、施設訪問アドボカシーを試行的に実施し、その具体的な方法及び基盤整備の在り方をアクションリサーチによって明らかにすることが目的である。本研究によって、児童養護施設のみならず児童福祉施設全般におけるアウトリーチ型権利擁護システムの創出を促す波及効果が期待される。

### 3. 研究の方法

アウトリーチ型権利擁護の開発を目的とするアクションリサーチの全体像を下図に示した。ミクロレベルのアクションリサーチによって実践方法を提示し、メゾレベルのアクションリサーチによって基盤整備に向けた仕組みについて提言を行う。



#### アクションリサーチの実施方法

施設訪問し子どもの意見表明権を支える「アドボケイト」の試行実践を NPO と協働で行った。年間通じて、週 1 回～月 2 回・2～3 時間、2 名のアドボケイト（研究協力者）が訪問し、入所児童のアドボカシー実践に取り組んだ。実践内容はエピソード記述で記入している。具体的には、施設職員との連絡調整によってアドボケイトが施設を訪問し、(1)遊びやコミュニケーションによるラポール形成、(2)入所児童の意見/思いの傾聴、(3)意見表明支援、(4)代弁/調整を行った。併行して、研究者とアドボケイトによる事例検討会（毎月 1 回）によってスーパービジョンを実施した。これらの訪問アドボカシーにかかわる実践内容を評価し、修正を加えるための研究会（毎月 1 回）を開催した。研究者・施設長・アドボカシー推進員・派遣団体代表者・アドボケイトから構成されるシステム検討会（年 3 回程度）において、虐待防止を含めた権利擁護の促進状況の評価、ケアの改善課題の検討と対処方法の提案、研究活動の評価を行った。子どもから訪問アドボカシーについて意見をもらい改善するための子ども委員会も複数回開催した。

#### 4. 研究成果

上記のように英国をモデルとして児童養護施設を定期訪問する「訪問アドボカシー」を 2 年間試行的に行った。アドボケイトを利用した子ども 19 名、職員 7 名にインタビュー調査を行い、事前ニーズ調査との比較から実践を踏まえた意義・課題を明示した。

職員の多忙さを背景に、子ども・職員双方が個別面談を高く評価した。面談で子どもが不満を話すことで落ち着き、自分から話すようになったといった【子どもに肯定的変化があった】。職員は「後回し」になっていた子どもの思いを聴こうと【職員の権利意識が向上した】。一方、子どもは訪問の【時間不足】を、職員は秘密保持等の【アドボケイトの原則への不満】【役割の分かりにくさ】が今後の課題とした。

これまでのアクションリサーチ及び実践のエピソード記述を報告書にまとめ、実施マニュアルとして 2021 年『アドボカシーってなに？施設訪問アドボカシーのはじめかた』（解放出版）を共著（栄留 里美，鳥海 直美，堀 正嗣，吉池 毅志）で出版した。一般向けに『子どもアドボカシーと当事者参画のモヤモヤとこれから 子どもの「声」を大切に作る社会ってどんなこと？』（栄留里美・長瀬正子・永野咲）でも紹介している。

2022 年には『施設訪問アドボカシーの理論と実践 児童養護施設・障害児施設・障害者施設におけるアクションリサーチ』という本を共著で出版（著者：栄留 里美，鳥海 直美，堀 正嗣，吉池 毅志）。「施設訪問アドボカシー」を、児童養護施設・障害児施設・障害者施設で実践した経験をもとに分析し、理論化を図った。

加えて、各地の講演・日本子ども虐待防止学会等の学会・イタリアのミラノカトリック大学での報告、公開報告会の開催等発信を行った。また本アクションリサーチが NHK などテレビや新聞などで取り上げられ、一般の方にも情報を発信できた。また厚生労働省の子ども権利擁護ワーキングで発表。本研究の影響もあって複数の地域でアドボケイト実践が開始し、本研究が協働で作成したマニュアルを活用いただいている。そのことから、本研究が研究で終わらず現場に寄与できたのではないかと考える。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 栄留里美	4. 巻 20
2. 論文標題 児童養護施設における訪問アドボカシー実践の評価研究：子ども・施設職員へのインタビュー調査に基づく考察	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 子ども家庭福祉学	6. 最初と最後の頁 53-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 栄留里美	4. 巻 17
2. 論文標題 イングランドにおける子どもアドボカイトの養成方法に関する研究 トレーナーへのインタビュー調査をもとに	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 九州社会福祉学	6. 最初と最後の頁 55-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 栄留里美	4. 巻 88
2. 論文標題 施設訪問アドボカシーの取り組みについて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 世界の児童と母性	6. 最初と最後の頁 23-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 栄留里美・鳥海直美・吉池毅志・堀正嗣	4. 巻 1
2. 論文標題 施設訪問アドボカシー科研報告書	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 施設訪問アドボカシー科研報告書	6. 最初と最後の頁 1-223
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 栄留里美	4. 巻 16
2. 論文標題 児童養護施設における訪問アドボカシー試行実践の意義と課題～子どもへのグループインタビュー調査に基づく考察	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 九州社会福祉学	6. 最初と最後の頁 15-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 栄留里美	4. 巻 21
2. 論文標題 イギリスのアドボカシー制度と国内における訪問アドボカイトの取り組み	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 子どもの虐待とネグレクト	6. 最初と最後の頁 46-54
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 栄留里美	4. 巻 10
2. 論文標題 英国における独立子どもアドボカシーの実践方法に関する研究 施設訪問アドボカシー実践者へのインタビュー調査を通して	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 福祉社会科学	6. 最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 栄留里美	4. 巻 11
2. 論文標題 子どもソーシャルワークにおける反抑圧実践理論の意義と可能性に関する研究	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 福祉社会科学	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 栄留里美	4. 巻 82
2. 論文標題 イギリスの子どもアドボカシーの取り組みと日本への導入可能性	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 世界の児童と母性	6. 最初と最後の頁 52-56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 栄留里美	4. 巻 382
2. 論文標題 施設訪問アドボカシー～試行実践をスタート～	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 はらっぱ	6. 最初と最後の頁 26-27
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計20件 (うち招待講演 12件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 栄留里美、相澤仁 (大分大学)、堀正嗣 (熊本学園大学)、鳥海直美 (四天王寺大学)、川瀬信一 (子どもの声からはじめよう)、奥山眞紀子
2. 発表標題 子ども若者の声・参画を促進する ～アドボカシー制度化の動き・試行実践・展望～ (査読付) 公募シンポジウム
3. 学会等名 日本子ども虐待防止学会, 第25回, (於 神戸ポートピアホテル)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 栄留里美、掛川亜紀、池田清貴、石田尚、中村みどり
2. 発表標題 児童福祉に子どもの声を～意見表明を支えるしくみを考える～
3. 学会等名 日本子ども虐待防止学会, 第25回, (於 神戸ポートピアホテル)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 宋留里美
2. 発表標題 英国の子どもの対象とする施設訪問アドボカシーの方法 - インタビュー調査から - 」
3. 学会等名 日本社会福祉学会第66回秋大会（金城学園大学）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 宋留里美
2. 発表標題 児童福祉施設への市民訪問アドボカシーモデルの開発 ~ 試行実践からみる課題と展望 ~ シンポジウム
3. 学会等名 日本子ども虐待防止学会第24回学術集會おかやま大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 宋留里美
2. 発表標題 「訪問アドボカシーの施行実践から」 藤林武史代表「動き出した！「新しい社会的養育ビジョン」シンポジウム
3. 学会等名 日本子ども虐待防止学会第24回学術集會おかやま大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 宋留里美
2. 発表標題 子どもアドボケイト養成講座
3. 学会等名 こどもフォーラム（名古屋）（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 宋留里美
2. 発表標題 子どもアドボケイト養成講座
3. 学会等名 子どもNPOセンター福岡（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 宋留里美
2. 発表標題 子どもアドボカシー
3. 学会等名 福岡子どもにやさしいまち子どもの権利研究会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 宋留里美
2. 発表標題 子どもアドボカシー ～英国と A 県の実践を通して～
3. 学会等名 子どもの声からはじめようプロジェクト（東京）（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 宋留里美
2. 発表標題 社会的養育と子どもアドボカシー～英国と日本の取り組みから～
3. 学会等名 子どもの家庭養育推進官民協議会（招待講演）
4. 発表年 2019年



1. 発表者名 宋留里美
2. 発表標題 社会的養育と子どもアドボカシー～英国と日本の取り組みから～
3. 学会等名 早稲田大学里親研究会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 宋留里美
2. 発表標題 子どもアドボカシー～英国と日本の試行実践を通して～
3. 学会等名 大分大学市民講座
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 宋留里美・堀正嗣・菊池幸工
2. 発表標題 カナダとイギリスの子どもアドボカシー 日本これからを考えるために
3. 学会等名 子どもNPOセンター福岡
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 宋留里美 (Satomi Eidome)
2. 発表標題 The pilot project of Independent Children Advocacy in Japan
3. 学会等名 Advocacy in child protection 2° Italian Convention of Independent Advocates (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 農野寛治
2. 発表標題 児童施設課程基礎コース 研修会 「子どもの権利擁護と身に付けて欲しい基礎知識」
3. 学会等名 大阪府社会福祉協議会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 農野寛治
2. 発表標題 大阪市児童施設連盟中堅・リーダー職員研修会 「児童福祉の基礎知識・職員倫理ー 施設内権利侵害の予防的取り組みー」
3. 学会等名 大阪府社会福祉協議会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 米留里美
2. 発表標題 英国の施設訪問アドボカシーの調査報告～ 意見形成の方法 障害児を中心に
3. 学会等名 障害学研究会九州沖縄部会大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 農野寛治
2. 発表標題 児童施設課程基礎コース
3. 学会等名 大阪府社会福祉協議会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 農野寛治
2. 発表標題 虐待防止のポイントについて 児童福祉施設で虐待が起きる背景や、実際の対応、予防策を考える
3. 学会等名 大阪府社会福祉協議会「労働セミナー」(招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 農野寛治
2. 発表標題 福祉と人権を考える 福祉専門職による不適切なかかわりの予防のために
3. 学会等名 児童養護施設 新任職員研修会(招待講演)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 堀 正嗣、栄留 里美、久佐賀 真理、鳥海 直美、農野 寛治	4. 発行年 2018年
2. 出版社 解放出版社	5. 総ページ数 243
3. 書名 独立子どもアドボカシーサービスの構築に向けて	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	久佐賀 真理  (Kusaga Mari)  (10312167)	長崎県立大学・看護栄養学部・教授   (27301)	現)シオン園施設長

## 6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	農野 寛治  (Nouno Hiroharu)  (30300338)	大阪大谷大学・人間社会学部・教授    (34414)	現)常磐会短期大学 学長

## 7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 Advocacy in child protection 2° Italian Convention of Independent Advocates	開催年 2019年～2019年
---	--------------------

## 8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関